

ヒロシマの灯が80年を語る

—被爆地広島での学び—

多摩市立和田中学校 3年 藤代 羽汰

7月30日、午前6時30分、多摩センター駅集合。同7時30分、新横浜駅着。道中、和やか。11時59分、広島駅到着。路面電車に乗り、ホテルへ直行。午後4時30分、平和記念公園着。

平和記念資料館では、原爆により変形し黒焦げになった服、三輪車が衝撃だった。別のフロアには触ってもよい瓦やビンがあった。瓦は爆風、熱線により、溶けて泡立っていた。ザラザラしていた。ぜひとも約3000度で溶けた瓦を実際に触ってほしい。一階の企画展示室では被爆80年企画展が開催されていた。展示資料は壊滅した街や市民の惨状を克明に記録した写真だ。資料館を出るとすぐに被爆アオギリ一世の木があった。多摩中央公園の被爆アオギリ二世の親である。

次に当時燃料会館があった地下室部分を見た。爆心地側に開口部が無かったため当時のまま残った。現在のレストハウスにいた野村さん一名を除き全員死亡した。そこで私は野村英三さんという人を知った。唯一生き残った野村さんは、当時47歳の時に現在の平和記念公園レストハウスの地下室で被爆された方であり、かろうじて逃れることが出来た。しかし、放射線により歯茎からの出血などの急性症状で死線をさまよった。その後、私達は公園内にある平和の鐘を鳴らした。

7月31日、午前7時、起床。同8時30分、平和公園内の「原爆の子の像」に千羽鶴を献納。原爆ドーム見学。同9時15分、ANT-Hiroshima事務所着。午後6時50分、ヒロシマ平和の灯のつどいに参加。再度原爆ドーム見学。

千羽鶴献納では、一人が一つ千羽の束を持ち、ガラスケースのフックに掛けた。「多摩市子ども被爆地派遣」の短冊は、平和のために何が出来るかを自分に問いかけた時、自分が小一の時から習ってきた習字を生かす事を思いついた。自筆で書くことに意味があると考え、それを申し出ると「多摩市子ども被爆地派遣」と書く事を任せて下さった。

ANT-Hiroshimaの方々との交流は、周りの方がみんな温かく、いつのまにか不安より楽しくなっていた。創設者であり理事長の渡部朋子さんは「～じゃけえ。」などと広島弁で明るく元気な方であった。AICJという平和のために音楽活動されている方達は、ピアノやヴァイオリンで「夏は来ぬ」や「浜辺の歌」を演奏して下さい。メンバーの4人は私と同じ中学生である。ANT-Hiroshimaの堀口さんは被爆樹木を育てる仕事をされており、多摩のアオギリ二世の育ての親である。彼は「なんとかしてくれ!」「助けてくれ!」という木からの声が聞けるそうだ。行く前はアオギリの木から何も聞こえなかった。行った後、声は聞こえるようにはならなかったが、木も私達と同じ心を持っているのであると思った。夕食後に参加した「ヒロシマ平和の灯のつどい」は毎年7月31日と決まっている。皆、ろうそくを持ち、「原爆死没者慰霊碑」の周りをゆっくり歩いた。式典は夕暮れから始まり、時間が経つほどに暗さを増し、ろうそくの火は輝き、美しいものだった。私は一人の女性に気がついた。西村宏子さんだ!!学校の英語の教科書に載る、ピースボランティアとして25年活動されている西村さんであった。ピースボランティアとは、被爆の実相や平和の大切さを伝える活動を行うボランティアをしている方達である。私達は慰霊碑の前にろうそくを置き、みんなで「青い空は」と「原爆を許すまじ」を歌った。

8月1日、7時起床。午前9時50分、ANT-Hiroshima着。三人の被爆者の方々とお会いした。それぞれのグループに分かれ、お話を聞いた。私は松本さんのお話を聞いた。三歳で被爆された女性だ。原爆投下直後、路面電車の中で人がつり革につかまったまま黒焦げになっていた記憶があるそうだ。時おり声は震え泣きそうに見えた。私は松本さんに原爆ドームの80年の変化を質問した。原爆ドームは広島町の町の変化や復興を見てきた建物であり、松本さんは、原爆は「作っていけない、使っていけない、止めなければならない」と強く言われた。非核三原則を被爆者としておっしゃった松本さんのお言葉は、価値がある。そして、現在戦後80年として節目を迎えた今、当時の事を話せる人が減っているのは事実だ。私達はそのために、後世に伝えていき、原爆を大昔の話にしてはならない。

最後に、私達8名は「平和だからこそ」広島に行けた。貴重な体験をさせて下さった多摩市の皆様、温かく迎えて下さった広島の皆様、同行して下さい下さった市役所の職員の皆様、応援してくれた家族に派遣員一同感謝したい。ありがとうございました。